

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：34404

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330171

研究課題名(和文) グローバリゼーション下の不平等社会における相対的剥奪 理論・実証的研究の刷新

研究課題名(英文) Theoretical and Empirical Studies of Relative Deprivation in Unequal Societies in a Time of Globalization

研究代表者

石田 淳 (Ishida, Atsushi)

大阪経済大学・人間科学部・准教授

研究者番号：40411772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円、(間接経費) 3,690,000円

研究成果の概要(和文)：不平等・相対的剥奪の実証研究としてインターネット調査を実施し、他者比較のメカニズムが主観的幸福と有意に関連することを見いだした。また、途上国における実証研究として、ネパールにおいて質問紙調査を実施し、カースト階層ごとに剥奪度が大きく異なることを見いだした。相対的剥奪メカニズムの理論的研究では、ある種の経済発展下における富の増大と平等化が、人々の相対的剥奪を高めるというパラドックスが生じること理論的に示した。さらに、相対的剥奪モデルの発展研究を行った。相対的剥奪指数の開発研究の成果として、相対的剥奪の総量、不平等指数であるジニ係数を機会不平等に起因するか否かによって分解する手法を開発した。

研究成果の概要(英文)：We conducted an internet survey for empirical analysis of reference group and relative deprivation, and found a significant relationship between the comparison mechanism and subjective well-being. We also conducted a questionnaire survey in Nepal as an empirical research of relative deprivation in developing countries, and found marked difference in degree of deprivation according to caste class. As for theoretical study of the mechanism of relative deprivation, we proved the theoretical existence of a paradox that people's feeling of relative deprivation can be enhanced by a certain kind of economic growth. Besides, we improved models of relative deprivation. As for study of relative deprivation indices, we proposed a method to decompose the societal average of relative deprivation as well as the Gini index of inequality according to whether it is caused by inequality of opportunity or not.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：数理社会学 相対的剥奪 グローバリゼーション 不平等 ジニ係数 主観的幸福

1. 研究開始当初の背景

2008年度～2010年度科学研究費補助金研究「グローバルな富の再分配と主観的幸福の増大」(基盤研究B(一般)20330114 代表者:高坂健次)において、われわれの研究グループは国家間での富の移転がどのようなかたちで主観的幸福の増大をもたらすかについて多面的に研究をしてきた。これら一連の研究の成果として、シミュレーションによって、世界の主観的総幸福量がどのような変数の組み合わせと「富の移転」のもとで最大化できるかの定式化にまで肉薄することができた(Ishida, Hamada and Kosaka 2009)。しかし、資源配分状態と主観的幸福の関係は線形的な単純なものではないことも合わせて分かってきた。

つまり、資源再配分という経済状態の人為的操作から主観的幸福という社会意識状態へのパスとの間には、操作の結果としての「不平等」状態、そして人びとの社会心理的機制としての「相対的剥奪」という要因が関与しており、より体系的で精緻化されたモデルの構築と政策提言のためには、これらの媒介メカニズムをより詳細に分析する必要があることが分かった。

これまで Frey and Stutzer の研究(2002=2005、『幸福の政治経済学』)に代表されるように、資源配分状態→不平等→主観的幸福に至る流れは主として経済学の学問分野が得意としてきた。一方、「相対的剥奪」の概念と理論は社会学において、Stoufferら(1949)の『アメリカ兵』や Merton の展開によって、最も社会学的な概念であり理論とされてきた。しかし資源配分状態、不平等指数、主観的幸福との関連性は体系的に理論化されてきたわけではない。現実の社会問題として、「相対的剥奪」という媒介要因が人びとの主観的幸福に至るパスであることが分かった以上、あらためて社会学の立場から経済学的アプローチの成果も勘案したうえで理論モデルを再構築することが急務である。

2. 研究の目的

本研究課題は、経済的な状態としての不平等状態がいかに人びとの相対的な剥奪感(不満)を生み出すか、そのメカニズムの解明を最終的な目的とする。このために、理論・実証の両面から不平等と相対的剥奪の関連に取り組む。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1) 不平等状態と人びとの満足/不満感との関連の記述。「相対的剥奪」概念が初めて世に出たのは、Stoufferらによる第二次世界大戦中のアメリカ兵に対する意識調査であった。こうした古典的な研究の再レビューに加えて、資源の不平等配分状態と人びとの満足/不満の関連を示す調査データのレビューと発掘を行う。日本国内の調査データとして

はSSM調査やJGSS調査などの階層関連調査が、国際比較調査としては世界価値観調査やアジア・バロメータなどの意識比較調査がターゲットであるが、埋もれた調査データにも目を向け、網羅的かつ包括的に実証的知見を蓄積する。さらに、こうした量的調査では把握が困難な社会における知見を得るために、フィールド調査を通して、途上国における状況を把握する。

(2) 相対的剥奪メカニズムの解明。相対的剥奪という一見するとパラドキシカルな現象が生じるメカニズムを、数理モデルを用いて解明する。この課題については既に、Boudonモデルを発展させた、Kosaka(1986)の研究やそれを引き継ぐ浜田(2007)の研究がある。こうしたゲーム理論系のモデルに加えて、Yitzhaki(1979)のアイデアを用いたより単純なモデルの提案(Kosaka and Ishida 2010)もある。こうしたモデル研究の流れを受けつつ、(1)の実証的研究の成果を踏まえて、さらなるモデルの展開と改良を目指す。さらに、モデルのインプリケーションの検証のために、状況をコントロールした小集団実験を行い、モデルの妥当性を検討する。

(3) 相対的剥奪指標の開発。実証から理論へと至る研究の流れの反対に、理論から実証への流れも同時に視野に入れる。具体的には、相対的剥奪のメカニズムを考慮したマクロレベルでの資源配分状況の指標の開発である。Yitzhaki(1979)は不平等指数であるジニ係数が一種の相対的剥奪指数と解釈できることを指摘したが、これはいくつかの強い仮定をおいたときに得られるおおざっぱな近似にとどまる。本研究課題では、(2)で見出されたメカニズムを考慮に入れた、より具体的で精緻化された指数を提案し、これを用いた歴史・実証研究も併せて提案する。

3. 研究の方法

本研究課題は、データによる不平等と剥奪感との関連分析を担当する計量班、データ分析を補完する知見を提供するフィールド班、相対的剥奪メカニズムの数理モデル化を担当するモデル班、数理モデルの知見をもとに相対的剥奪指数を構築・応用する指標班、以上4班の有機的連携のもと遂行される。

1年目に当たる平成23年度には、これまでのわれわれの研究グループの成果を取り入れつつ、不平等と相対的剥奪に関する実証的研究を集中的に実施する。2年目には、得られた経験的知見をもとに既存の剥奪モデルを見直し、不平等状態による相対的剥奪生成メカニズムを解明する数理モデルの構築に集中的に取り組む。完成年度となる3年目の平成25年度には、これまでの2年間の成果をもとに、マクロレベルでの相対的剥奪指数を開発し実際に応用する。

4. 研究成果

(1) 不平等・相対的剥奪の実証研究、(2) 相対的剥奪メカニズムの理論的研究、(3) 相対的剥奪指数の開発、という3つの研究目的に対応して研究成果を述べる。

(1) Yitzhaki モデルの出発点となった、Runciman の相対的剥奪論を中心に古典的な相対的剥奪論の再検討を行い、相対的剥奪概念の整理を行った(論文)。さらに、既存の調査データを用いて、Yitzhaki モデルを応用した計量分析を行い、他者比較のメカニズムが収入や生活の満足感、階層帰属意識といった社会意識を規定していることを確認した(論文)。

これらの成果を引き継ぎ、より精緻な形で客観的な不平等状態と主観的な剥奪感の関連を探る目的で国内調査を実施した。具体的には、人々の抱く相対的剥奪と準拠集団選択の関連、そのほかの社会経済的地位との関連を探るための実験的な形式の質問紙調査を、インターネット調査という形で平成 25 年 2 月に日本国内で実施した。この調査結果の分析より、人びとの属性・社会的地位に応じて、他者比較の基盤となる準拠集団の選択次元が異なること、またそれに呼応して、準拠集団の所得分布イメージが変化すること、さらに準拠集団の所得分布イメージに基づく他者比較のメカニズムが主観的幸福感と有意に関連することが見いだされた(論文)。

本調査は、準拠集団選択を主題とする質問紙調査としては近年数少ない試みの一つとして、相対的剥奪論の文脈にとどまらず、主観的幸福研究や社会意識研究に対して、有用な知見を提供するものである。

また、途上国における不平等と相対的剥奪との関連を探る試みとして、ネパールを対象にしたフィールド調査を継続的に行った。こうしたフィールド調査を発展させ、ネパール・カトマンズ近郊の Kirtipur 地区において、相対的剥奪を主題とした 500 サンプル規模の質問紙調査を平成 25 年 3 月に実施した。公式には廃止されたカースト制度ではあるが、カースト階層ごとに剥奪度は大きく異なり、また社会的な不満への関連にも違いがみられた。ネパールにおいて、サンプリング調査が実施されること自体がまれであるために、本調査はネパール社会研究に対しても大きな貢献となるものである。なお、ネパールにおける相対的剥奪の実証研究は、基盤研究(C)「相対的剥奪の計量社会学的実証研究」(代表：中野康人・関西学院大学)において、2014 年度以降も研究を継続させる。

(2) 相対的剥奪メカニズムの理論的研究では、いくつかの大きなブレークスルーがあった。一つには、1990 年代の中国において、急速な経済発展が見られたにもかかわらず、人びとの主観的幸福はむしろ低下したという「チャ

イナ・パズル」(Brockmann et al. 2008)、あるいはこうした傾向を一般化した「不幸な成長パラドックス」(Graham 2009)という知見を出発点にして、Yitzhaki の相対的剥奪モデルに依拠しながら、ある種の経済発展下における富の増大と平等化が、人々の相対的剥奪を高めるというパラドックスが生じること理論的に示した(論文)。このモデルをより包括的な一般モデルに発展させるとともに、中国の民工の幸福感といった具体的問題への応用を進めた。この成果は単なる理論的意義にとどまらず、不平等・経済成長と幸福を巡る現代的な課題とも直結する今日的な意義も持ち合わせている。

また、ゲーム理論の枠組みで一種の投資行動の結果として相対的剥奪現象をモデル化した Boudon、Kosaka のモデルを小集団実験状況で再現し検証する研究を行った。理論からの予想と実験データを比較したところ、投資行動の予測は適格的であったが、意識との関連については予想と完全には一致しないことが分かった(論文)。この結果は、理論モデルのさらなる精緻化に寄与するものである。

そのほか、相対的剥奪の理論的研究は多面的に進められ、Boudon-Kosaka モデルの進化ゲームの枠組みでの発展(論文)、Yitzhaki モデルを応用した移民問題と相対的剥奪の関連のシミュレーション分析(論文)といった成果を得た。

(3) 相対的剥奪指数の開発研究の成果として、Yitzhaki の相対的剥奪指数をもとに、相対的剥奪の総量、そして不平等指数であるジニ係数を機会不平等に起因するか否かによって分解する手法を開発し、データ分析に応用した(論文)。この手法は相対的剥奪を「正当なもの」とそうでないものに峻別する一つの方法を提示しており、社会心理的な相対的剥奪論と客観的な経済的不平等論、そして規範的な正義論を結び付ける重要な成果であるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 30 件)

石田淳、高坂健次、浜田宏、A Paradox of Economic Growth and Relative Deprivation, Journal of Mathematical Sociology、査読有、未定、2014、未定

DOI:10.1080/0022250X.2013.815189

石田淳、機会不平等に起因する相対的剥奪の測定、理論と方法、査読有、29(1)、2014、81-97

DOI:未定

浜田宏・前田豊、小集団実験による相対的剥奪モデルの検証、理論と方法、査読有、29(1)、2014、19-36

DOI:未定
前田豊、比較対象選択と所得イメージ、
理論と方法、査読有、29(1)、2014、37-57
DOI:未定
Yang Yang、高坂健次、The Varying Degrees
of Societal Relative Deprivation in
Migration Process、理論と方法、査読有、
29(1)、2014、59-80
DOI:未定
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(十一)、
関西学院大学社会学部紀要、査読無、118、
2014、79-87
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000051569.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000051569.PDF)
仲修平・前田豊・石田淳、階層意識とし
ての勝ち組・負け組——準拠集団に関す
るインターネット調査結果の分析(2)、大
阪経大論集、査読無、64(3)、2013、139-157
<http://www.osaka-ue.ac.jp/file/general/7594>
前田豊・仲修平・石田淳、地位比較対象
の直接的測定を試み——準拠集団に関
するインターネット調査結果の分析(1)、
大阪経大論集、査読無、64(2)、2013、
161-183
<http://www.osaka-ue.ac.jp/file/general/7081>
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(十)、
関西学院大学社会学部紀要、査読無、117、
2013、49-57
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000046535.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000046535.PDF)
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(九)、
関西学院大学社会学部紀要、査読無、116、
2013、135-143
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000036626.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000036626.PDF)
前田豊・石田淳、Income Comparison as a
Determining Mechanism of Class
Identification: A Quantitative and
Simulation Study Using Japanese Survey
Data、International Journal of Japanese
Sociology、査読有、22、2013、143-159
DOI:10.1111/ijjs.12010
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(八)、
関西学院大学社会学部紀要、査読無、115、
2012、97-104
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000029179.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000029179.PDF)
石田淳、An Evolutionary Game Analysis of
the Boudon-Kosaka Model of Relative
Deprivation、関西学院大学社会学部紀要、
査読無、114、2012、155-170
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000021709.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000021709.PDF)
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(七)、
関西学院大学社会学部紀要、査読無、114、
2012、245-256
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000021714.PDF](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000021714.PDF)
高坂健次、相対的剥奪論 再訪(六)、
関西学院大学社会学部紀要、査読なし、

113、2011、35-43
[http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attac
hed/0000019376.pdf](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/0000019376.pdf)
石田淳、相対的剥奪と準拠集団の計量モ
デル——Yitzhaki の個人相対的剥奪指数
の応用、理論と方法、査読有、26(2)、2011、
371-388
DOI:10.11218/ojams.26.371

〔学会発表〕(計 29 件)

中野康人、相対的剥奪の実証研究——
ネパールにおける階層と剥奪、第 86 回
日本社会学会大会、2013 年 10 月 12 日、
慶應義塾大学
石田淳、所得分布イメージ上の相対的剥
奪と主観的幸福——インターネット調
査の分析、第 56 回数理社会学会大会、
2013 年 8 月 27 日、関西学院大学
Yang Yang、Migration and Relative
Deprivation: Effects of Types of Social
Networks、第 56 回数理社会学会大会、
2013 年 8 月 27 日、関西学院大学
前田豊、比較準拠集団の直接測定分析、
第 56 回数理社会学会大会、2013 年 8 月
27 日、関西学院大学
高坂健次、A Formal Approach to the
'China Puzzles', The 11th Conference of the
Asia-Pacific Sociological Association、2012
年 10 月 22 日、Ateneo de Manila University
(Quezon City, Metro Manila, Philippines)
石田淳、Modernization and Paradoxes of
Relative Deprivation、The 5th Joint
Japan-North America Mathematical
Sociology Conference、2012 年 08 月 16 日、
Colorado Convention Center (Denver,
U.S.A.)
石田淳、最適地位選択モデルによる主観
的地位分布の説明、第 53 回数理社会学
会大会、2012 年 3 月 15 日、鹿児島大学
前田豊、Subjective Income Status and Class
Identification、The 40th World Congress of
the International Institute of Sociology、
2012 年 2 月 19 日、India International
Centre (Delhi, India)
石田淳、Economic Growth and Paradoxes
of Relative Deprivation、The 40th World
Congress of the International Institute of
Sociology、2012 年 2 月 19 日、India
International Centre (Delhi, India)
前田豊、他者比較による主観的地位分布
と階層帰属意識分布、第 84 回日本社会
学会大会、2011 年 9 月 18 日、関西大学
石田淳、機会不平等に起因する相対的剥
奪指数、第 84 回日本社会学会大会、2011
年 9 月 17 日、関西大学

〔図書〕(計 4 件)

石田淳、東京大学出版会、相対的剥奪の
社会学、2014 [刊行予定] 未定
佐藤嘉倫・木村敏明(編) 浜田宏(分

担執筆) ミネルヴァ書房、不平等生成
メカニズムの解明、2013、187-205

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/daishiatsu/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 淳 (ISHIDA, Atsushi)
大阪経済大学・人間科学部・准教授
研究者番号：40411772

(2) 研究分担者

渡邊 勉 (WATANABE, Tsutomu)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30261564

浜田 宏 (HAMADA, Hiroshi)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：40388723

中野 康人 (NAKANO, Yasuto)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：50319927

高坂 健次 (KOSAKA, Kenji)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：60027977
(平成23年度まで研究分担者)

(3) 連携研究者

古川 彰 (FURUKAWA, Akira)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90199422
(平成25年度以降研究分担者から連携研究者へ)

斎藤 友里子 (SAITO, Yuriko)
法政大学・社会学部・教授
研究者番号：80278879
(平成24年度以降研究分担者から連携研究者へ)

松田 素二 (MATSUDA, Motoji)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852